

夏目漱石著「こころ」を読む

私はその人を常に先生と呼んでいた。だから此所(ここ)でもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚(はばか)る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起こすごとに、すぐ「先生」と云(い)いたくなる。筆を取っても心持ちは同じ事である。余所々々(よそよそ)しい頭文字(かしらもじ)などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。……

夏目漱石著「こころ」新潮文庫 1952年刊

- 2006年8月14日記 -